



ロンドンから列車で1時間ほどの
場所に建つオルソーブ城。
7月～9月の3カ月間、
一般公開され、オリジナルの
家具調度を見ることができる

Chapter 1 貴族の館 *Country House*

オルソーブ城

Althorp

イギリスの郊外には16世紀から19世紀半ばにかけて建てられた、カントリー・ハウスと呼ばれる館が数多く現存する。これらは貴族が本拠地とする広大な領地に建てた屋敷で、富と権力を象徴するものでもあった。

宮廷に仕えていた貴族たちは、4月から7月をロンドンで暮らし、8月から3月を自分の領地で過ごしていた。領地での生活の重要な部分を占めたのが、屋敷で開くパーティーだった。そこで、カントリー・ハウスには大勢の客を招いて食事やダンスをするための広間といくつもの居間や応接間が設けられた。パーティーで招待客をどのようにもてなすかが主人の人物評価となったため、建物だけでなく、部屋のしつらえや家具・調度への関心が高まったのである。

イギリスに残るカントリー・ハウスの中にはホテルになったり、ナショナル・トラストに寄贈されるなどして、形は昔のままでも創建した家族の手を離れ、維持管理されている館も少なくない。故ダイアナ元皇太子妃の実家であるオルソーブは、1508年より約500年にわたりスペンサー伯爵家によって受け継がれてきた。

規模が大きく立派な屋敷はカントリー・ハウスと区別され、ステートリー・ホーム (Stately Home) と呼ばれており、オルソーブもその一つ。14,000エーカーの広大な敷地に何十室もの部屋を持つ屋敷で、500年の間に建物は何度か改装されているが、貴重な家具・調度品は代々の当主によって大切に受け継がれ、往時の歴史的、芸術的価値を今に伝えている。

これらの貴重な家具・調度品をスペンサー伯爵監修のもと家具デザイナー、ポール・メートランドスミスによって復刻されたのが、「オルソーブリビングヒストリーコレクション」である。時代を超えて愛されてきた家具は現代に甦り、より輝きを増している。



左は5代目スペンサー伯爵が
1865年にロンドンで購入したマホガニー
のコモード（1770年製）。
右はそれをもとにリプロダクトされた
オルソーブリビングヒストリーコレクション。
当時の造形を忠実に再現している



オルソーブ城の主である
第9代目チャールズ・スペンサー伯爵は、
故ダイアナ元英国皇太子妃の弟にあたる

Chapter 2

貴族の応接間

Drawing Room

オルソープのサウス・ドロ잉・ルーム。
かつてはダイニング・ルームとして
使われていた部屋。スペンサー伯爵家ゆかりの
人物の肖像画が壁一面に飾られている

自慢の品を陳列するためのショーケース

イギリスのカントリー・ハウスには、シッティング・ルーム、ドロ잉・ルームといった独特の呼称をもつ部屋がある。シッティング・ルームは居間を指し、ドロ잉・ルームは訪客を招き入れる応接間を指す。

右の写真はオルソープのサウス・ドロ잉・ルームだが、壁には何枚もの肖像画が飾られ、さまざまなデザインのソファと椅子がゆったりと、見栄え良くレイアウトされている。

訪客に自慢するものといえば、由緒正しい血筋を誇示する先祖の存在、そして歴史的な重要人物や王族との姻戚関係が何よりとあって、肖像画は非常に好まれた。写真のドロ잉・ルームをはじめ、オルソープのピクチャー・ギャラリーや階段室サルーン、ル

ーベンス・ルームなどの至る所に、時代を代表する著名な画家に描かせた肖像画が飾られている。

美術品や装飾品が作られるようになると、これらのコレクションを飾る家具としてディスプレイ・キャビネットが流行した。キャビネットは扉が木製でなくガラス製でできており、当時は高い技術が必要とされたため、高価な品物であったが、自慢のコレクションを引き立たせてくれる家具として、競って取り入れられることとなった。

応接間には3人掛けのソファにパーソナルチェアを組み合わせ、カクテルテーブルやランプテーブルを置く。壁面にコンソールテーブルやゲームテーブル、ディスプレイキャビネットを置くのもよいだろう。



オルソープのピクチャー・ギャラリー
に置かれているルイ15世様式の
3人掛けソファ。マホガニー製。
238×101×106cm



ジョージ3世様式のウィングチェア。
ゆったりと安定した姿勢が保
たれ、長時間楽に座っていられ
(オルソープリビングヒストリー
コレクション)
73×68×116cm



マホガニーのカクテルテーブル。
アーモンド型で
4方向に引き出しが付いてる。
(オルソープリビングヒストリー
コレクション)
93×64×54cm



ルイ16世スタイルのチェア。
古代ギリシアを基調としたシンプルな古典主義のスタイルで、
先細りの脚はティバードレッグと呼ばれ
(オルソープリビングヒストリー コレクション)
43×48×85cm



ジョージ3世様式のマホガニー製チェア。
オルソープのマルボロー・ルームには
赤い革張りのオリジナルがある。
(オルソープリビングヒストリー コレクション)
51×61×97cm



リージェンシー様式のアームチェア。黒塗りに金の模様が
繊細で上品な美しさを放っている。
(オルソープリビングヒストリー コレクション)
59×62×91cm



17世紀半ばに政治的な
会議用につくられた
「グレート・チェンバー」。
現在は客間として使われている

Chapter 3 貴族の食堂 *Dining Room*

夜通しの晚餐は、部屋をいくつも移動して

オルソープのエントランス近くに、ウットンホールと呼ばれる広間がある。中世の時代、ホールは貴族の権力の象徴ともいべき重要な部屋だったが、19世紀に入ると格式張らない居室となり、パーティーの時は晚餐の前に集まって語らう場所として使われるようになった。

晚餐に招かれた客は執事に迎えられ、ドロ잉・ルームへ集まる。そこで食前酒を飲み談話。いよいよ午餐の時間に

なるとダイニング・ルームへと移動、予め主人が決めた席に着き、長い時間をかけて食事をする。右の写真に12人掛けの長テーブルが置かれているが、座席は次のように決まる。屋敷の主人と女主人が対面で中央に座り、その両サイドには主賓が座る。男女は交互に座るのが普通で、食事が終わると女性達はシッティング・ルームに移動してお茶を飲み、歓談。男性はそのままダイニング・ルームで食後酒を

傾けながら、会話をしたり、シガー・ルームに移動し、シガー・ジャケットに着替えて酒とシガーを楽しんだりした。

ダイニングはフルセットで揃えるのが一般的。壁やカーテンを単色でシンプルなものにすると、数を揃えた美しさが際立つ。ルイ16世様式の家具を用いれば、優雅で改まった雰囲気になるだろうし、リージェンシー様式を選べば、凛とした気品が漂うだろう。



オルソーブのビリヤード・ルーム。
ビリヤードは19世紀後半に流行し、
当時、ほとんどのカントリー・ハウスが
既存の部屋を改装して
ビリヤード・ルームを設けた

ジョージ3世様式のマホガニーと
ローズウッドのカクテルキャビネット。
内側に鏡がはめ込まれている。
(オルソーブリビングヒストリーコレクション)
55×34×153cm



パーティーでゲストを 飽きさせない工夫

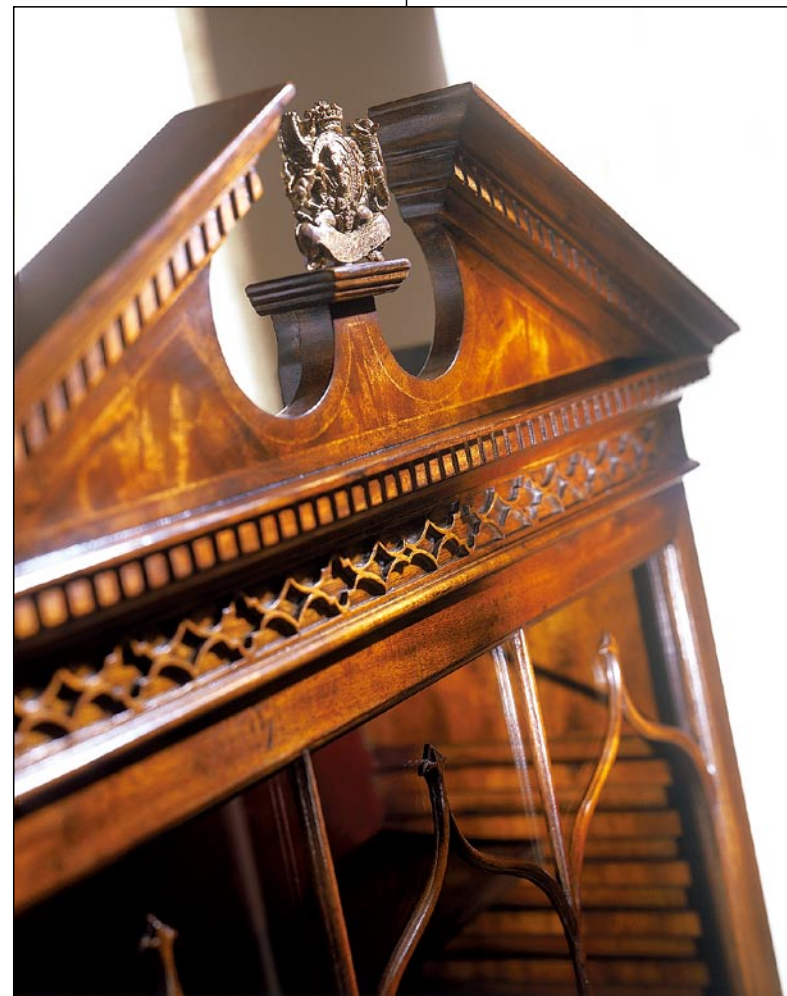
労働とはおよそ無縁の貴族にとって、パーティー何よりも大事。友人や知人たちとあり余る時間を退屈せずに過ごすために、様々な遊びを催した。狐狩りなど馬に乗って行うハンティングや、野鳥を射撃するシューティング、川でのフィッシングなど屋外のスポーツも貴族のたしなみだった。屋内ではダンスやゲームを専ら楽しんだ。

カードゲームやビリヤード、バックギャモンなどは屋内遊戯の代表で、ゲーム専用の部屋が設けられ、そこにはゲームテーブルや食後酒を楽しむためのパーキャビネットなどが置かれた。

オルソーブのビリヤード・ルームは、暖炉を中心にしてシンメトリーにキャンドルスタンドとソファが置かれている。シンメトリーの配置は緊張感を生み、家具の美しさを引き立てる。

Chapter 4 貴族の遊戯室 *Billiard Room*

リージェンシー様式の
マホガニーのゲーミングテーブル。
106
×
55
×
76
cm



◆エリザベス1世時代

16世紀半ば、エリザベス1世の統治により人々の生活が安定したことで、家具も豪華で安定したものが作られるようになった。スツールやベンチに背もたれがついたダイニングチェアもこの時代に作られた。

◆ジェームズ1世時代

ジャコビアン様式と呼ばれ、大陸からの影響や職人の技術の進歩が顕著に見られる時代。ボビン形挽き物など手の込んだ細工が施され、引き出しの開け閉めがスムーズになるよう、サイドランナーが付けられた。

◆チャールズ1世、2世、3世時代

折りたたみ式のオケージョナルテーブルやコレクションを飾るためのキャビネット、化粧をするためのドレッシングテーブルなど新しい家具が次々に登場した。デザインはオランダ、スペイン、フランス、シノワズリ(中国趣味)の影響を受けている。

◆ウィリアム3世とメアリーの時代

ジェームズ2世の娘、メアリーがオランダ総督オレンジ公ウィリアムと結婚。オランダから連れて来られた優れた家具職人が新しい技術を持ち込み、薄板寄せ木細工や木象嵌などが家具に使われるようになった。

◆クイーン・アンの時代

メアリーの妹のアンが即位すると、優雅で快適な家具が誕生した。その代表がクイーン・アン・チェア。通称ベースバックと呼ばれる花瓶のシルエットをした背もたれ、体の線に合わせて緩やかにカーブを描き、直線的な後脚につづくプロポーションの美しさ。動物の脚を模したカプリオールレッグも誕生した。

◆ジョージ1世、2世、3世時代

家具デザイナー、トーマス・チッペンデル(1718～1779)の、重厚で力強いデザインと機能性を併せ持つ家具が一世を風靡した。マホガニー材に、すかし彫りを施したりボンバックチェアは優雅なデザインながら、背板の形は四角くがっしりと男性的なのが特徴。脚先の装飾も、中国風の鳥の爪が黄金のボールをつかんだクロウ・アンド・ボールと呼ばれる力強いものになった。

◆ジョージ4世時代

1811年から1820年の間、ジョージ4世が摂政(リージェンシー)を務めたことに由来し、19世紀初めに流行した家具はリージェンシー様式と呼ばれる。サーベル脚と呼ばれる外へ反り返った脚が特徴。新古典主義の流れを汲み、さらに忠実にギリシア、ローマ、エジプトの古典を取り入れたシンプルで繊細かつ上品な家具が作られた。

◆ヴィクトリア女王時代

若い女王の統治下、華やかなスタイルが好まれるようになった。1830年代半ばから風船のように丸くふくらんだ形のバルーンバックチェアが流行。飾り物を陳列するサイドボードも登場した。

Chapter 5 貴族の寝室 *Bedroom*

右の写真はオルソープのウィリアム王の間（キング・ウィリアムベッドルーム）である。四柱式の天蓋付きの立派なベッドを中心に暖炉、鏡、カウチ、ティーテーブル、チェアなど様々な家具が置かれている。こうした個人の私室は専用のバスルームや眺めのいいテラスなどが付いた広い部屋で、チェンバールームと呼ばれ、寝室としてだけでなく、書き物をしたり親しい人呼んでお茶をしたり、多目的に使われた。

着替えや身繕いも行う部屋なので、大きな鏡は必需品。衣装を納める華麗なコ

書斎と談話室を兼ねた プライベートな居室

モードやチェスト、書き物をするときのライティング・ビューロー、ちょっと横になるためのカウチ、寄せ木の宝石テーブルなどをバランスよく置いて美しさと快適性を兼ね備えた居室にしたい。

部屋の主が女性であればガブリエール脚のティーテーブルとウィングチェアのような安楽椅子か布張りの肘掛け椅子を組み合わせて、サロン風にしてもよいだろう。男性であればチッペンデル様式のデスクとアームチェアで、重厚感のある書斎を兼ねることもできる。



ウィリアム王の間で暖炉の上に
使われている鏡のリプロダクト。
ジョージ3世ロココ様式。
下は鏡に合わせたデザインの
コンソールテーブル。
(いずれもオルソープリビング
ヒストリーコレクション)
鏡165×8×82cm
コンソール163×60×90cm

故ダイアナ元皇太子妃が
里帰りしたときに使用したという
ウィリアム王の間は、
水色と白を主体に上品な色調で
まとめられている



右:コーナーチェアとスツールを
組み合わせてカウチのように
リージェント様式のマホガニー製。
(いずれもオルソープリビング
ヒストリーコレクション)
83×57×86cm。69×69×32cm
右奥:ジョージ2世様式のマホガニーの
ライティングビューロー
(オルソープリビング
ヒストリーコレクション)
64×75×97cm

